

講義②

「図書館がつくる利用者コミュニティ」

講師：奈良県立図書情報館

図書・公文書課 課長 乾 聡一郎

1 はじめに

今、図書館の新たなあり方が模索されている。図書館の新たなあり方の可能性を、これまでの図書館機能からではなく、新たにどのような視点を持つことが可能で、どのようなアプローチができるのかという観点から考えてみたい。

2 ニーズを創り出す

従来から利用者ニーズからサービスを考えることは当たり前に行なわれてきた。しかし、そうではなく、利用者がこんな情報や人と出会いたかったと思わせるような、いわばニーズを創り出す（開拓する）という視点が必要ではないだろうか。ニーズを創り出すことで、図書館が情報や人と出会う「場」となる。そして、そうした「場」で「繋がること」と「共有すること」で緩やかなコミュニティが形成される。そこでは、館とコミュニティも従来の運営—利用という関係から、「フォローする・される」の関係を築く「場」へと繋がっていくのではないかと思われる。

3 「公共」と「個人」から「公」—「共」—「個人」へ

これまでの日本社会では、「公共」と「個人」という関係性があたりまえのものとされてきた。しかし「公共」と「個人」という関係からは、要望とクレームしか生まれてこない。「個人」の想いと共感がかたちになるような、新たな「共生」空間ともいうべきものが考えられないだろうか。「公共」と「個人」から「公」—「共生空間」—「個人」という関係性で考えてみたい。

「公共」ではなく、「公」と「個人」が互いにフォローする・される関係を築くような「場」、その実験場としての図書館という「場」の可能性である。

そのような図書館におけるコミュニティや空間とはどのようなものか？一例として、それを内と外のコミュニティということで考えてみる。外のコミュニティと、利用者の活動コミュニティを育むことである。奈良県立図書情報館の利

用者コミュニティには、IT サポーターズやビブリオバトル部などがある。IT サポーターズは館の情報関係施設等のヘビーユーザーとして自主的な情報発信を行なうことで、他の利用者を巻き込んでいる。また、ビブリオバトル部では、ビブリオバトルの自主運営の他、部員各人がもっているスキルを共有する自主講習会や、本をめぐる冒険プロジェクトや言葉の森プロジェクトといった独自企画も行なっている。いずれも、自発的な教え—教えられる関係が生まれている。

内のコミュニティとは、職員の活動コミュニティのことで、内が育たなければ外は育たない。図書展示などをルーチンにせず、司書自身がワクワクして取り組むことを目指している。やりたい人が集まり、企画コミュニティをつくり、ブレストによるテーマ設定から設営・広報まで、一から全て行なう。職員同士の新たな発見、気づきが次に繋がっている。

4 文化発信メディアとしての図書館

図書館に残された最後の役割は情報資源（リソース）を再編集し発信すること、言い換えれば文化発信メディアとしての図書館として機能することではないだろうか。「私はこういう情報や人と出会いたかったと思わせる施設」となることだと思う。人と情報、人と人とが繋がりそして、生まれた新たな共生空間は、コミュニティが縦横に活動する舞台ともなる。そこでは、実利ではなく（何かに役立つことではなく）、知的好奇心に導かれ、『教え教えられる』関係と、そこから生まれる、ともに『創る』喜びがある場となるだろう。そこにこそ、これからの図書館の可能性があると思うのである。



▲講義②